

琉球大学学術リポジトリ

公共事業と赤土流出

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大城, 肇, Ooshiro, Hajime メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/829

大城 肇

沖縄の島々はその周りを海に囲まれ、沿岸域はサンゴ礁という海棲生物の宝庫に囲まれている。サンゴ礁域には造礁サンゴをはじめ魚類、貝類、海草類、甲殻類など多様な生物相が生息し、沿岸地域の人々のみならず人類にとって共有すべき貴重な財産となっている。豊かなサンゴ礁は多くの生物の住み処となり、外洋の荒波から島を保全し、人間にとって豊かな資源と美しい空間を提供するので、豊かなサンゴ礁はヒトと海洋生物の共存と繁栄の証となる。

しかし、このようなヒトと海洋生物の関係を危うくする開発という名の人間の活動が、沖縄の沿岸域で半世紀にわたって展開されてきた。地球温暖化や台風等の影響もさることながら、サンゴ礁に影響を与えた戦後期の沖縄における人間活動は、海の中と陸上においてそれぞれ行われてきた。陸上からのサンゴ礁へのインパクトは、赤土（国頭マーヅ、島尻マーヅ、ジャーガル、沖積土壌等沖縄県に分布するすべての土壌）の流出によるものが大きい。山林に乏しく、河川域が短い沖縄の地理的特性は、降雨時の赤土土壌の流出を招き、海域汚染の最大の元凶となっている。

沖縄の環境問題の代表である赤土流出は、沖縄本島北部や石垣島や西表島で1950年代に始まったパイナップル栽培が原初であるとされる。しかし、沿岸海域を赤く染め、サンゴ礁に影響を与えるようになったのは、1972年の日本復帰以後の土地改良事業等の公共事業や米軍の実弾砲撃演習等によるものである。本土復帰後、経済的に財政移転と基地収入と観光収入に依存する体質が強まっているが、赤土流出等の環境問題も財政と基地と観光開発に起因しているのが沖縄の特徴である。

公共事業の工法の特徴は、全国一律の規格によるものが場所を問わずに施工されたことであった。今でこそ、環境問題が喧しくなったので、その地域の特性を考慮に入れるようになったが、沖縄の地域特性・地形的特性等を考慮することなく行われてきた開発の負の側面が、赤土流出による海域汚染とサンゴへの影響であった。

赤土は、粒の大きい集中性の雨、粒子が細かく粘着性の乏しい土壌、急峻な地形と短い河川という自然的要因に、開発工事や営農活動、米軍演習などの人為的要因が加わって、継続的に沿岸域に流れ込み、サンゴ礁はいうまでもなく、目玉の観光や水産養殖業や県民生活に悪影響を及ぼしている。今後の公共事業のあり方として、これまで汚染し破壊してきた自然環境を修復する事業を公共事業として採択する必要がある。

沖縄県では「沖縄県赤土等流出防止条例」を制定し、工事を行う際の赤土等流出防止のために、発生源対策、流出濁水対策、濁水最終処理対策をとることを定めている。たとえば、濁水最終処理対策として、同条例では、裸地1,000平方メートルにつき150立方メートルの沈殿池容積を確保すること、また、貯留濁水は浮遊物質質量を200mg/l以下で排出することなどを定めている。

沖縄県における赤土等の推定年間流出量は、開発事業からの流出量が大幅に減少したことから、同条例施行前の58%水準に減少しているとみられている。また、農地からの流出量が全流出量の74%を占めており、農地の流出防止対策が大きな課題となっている。